

Title	古代日本人の世界觀 日本の言語と神話(城戸幡太郎著, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.159- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0159">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0159</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

尙ほ所謂漢學國學の影響を免れないものであつたが、其前後から西洋の史學研究法も次第に感化を及ぼし、殊に文化史の聲が高くなる一方には、唯物史觀の青年史家に及ぼす魅力も侮り難く、今や其混戰狀態にあるといつてもよからう。併し靜かに史學史の動きを考へるこ一般文化發展の過程と同じく、古來國內の事情や外國の影響が錯綜して或る時代に一方に傾いたものが、他の時代には閑却されて、他の新しきものこ代り、反動に次ぐに反動をしてゐるが、何れは堅實なる歩みを取つて中正に歸することであらう……

こ結んで居られる。而して本項の明治時代以後に詳細なのは現代最も接近し、其知識が國史學の將來をトするに最も役立つべきものなるに拘らず、これに關する適當なる著書論文等の缺如するに依るこ博士の心盡しである（即ち、明治政府の修史、大日本史料大日本古文書の編纂出版、明治の新史風、史學發表機關、史潮の變遷、修史の缺陷、文化史の流行等を詳細に述べて居られる）

本項は僅々百餘頁に過ぎないが我國の歴史編纂の變遷は極めて手際よく叙述せられて居る（國史編纂の盛衰は正に文化の消長と相並行するものであるこの定義は多少抽象に失する嫌がないでもないが）常に學界の先導として立たれる博士に敬意を表すると共に本書を大方に推薦する次第である（菊判本文一三三八頁、定價九圓五拾錢）。（淺子勝二郎）

## 古代日本人の世界觀

（城戸幡太郎著  
岩波書店發行）

### 日本の言語と神話

本書は、昭和三年著者が法政大學で講じた民族心理學の演習として古事記と日本書紀との解釋をなしたのを動機として書いた諸論文之を完成せんがため書いた原稿を一括したものである。著者はいふ。ヴァントにより組織された民族心理學は、一種の精神的人種學ともいふべきものであり、その發達の法則と稱するものはある假定された標準により段階づけられた種々なる民族精神の特徴にすぎぬ。社會は記録をもち、精神的遺物の多くは此記録によつて傳へられる。もし此記録が、失はれれば、それと共に歴史がなくなる。記録は、理解される必要あり、その解釋の方法は、教育に於ける言語の理解に俟たねばならぬ。歴史は、吾人にこり意識的存在であるかぎり、同時に言語的存在である。言語は、歴史的社會的實在性として最も具體的特殊性をもつ存在である。日本語には日本語の特性がある。かゝる言語の特性の研究により精神生活の歴史性を認識なし得る。かゝる文獻的解釋學としての心理學の問題を特に民族心理學に對し考古心理學と稱したい。民族心理學が人間精神の發達をその原始的なるものの假定によつて説明するこすれば考古心理學は、人間精神の歴史をその古代的なるもののが見出によつて解釋する。本書により古事記及び日本書紀に表現されてくる日本人のかゝる古代的性格を發見せんとする。以上が著者の本研究により企圖した所である。第一章、國語の表現と

神話の解釋に於て、著者は、神話の成立を説明するにはその表現してをる意味を解釋せざるべからずとし、日本の神話は、國語により表現されてをる。これを解釋するには國語の構造を理解せねばならぬ。國語の語原解釋に三つの心理的原則、即ち融通性、活用性、類比性がありとし、古事記は、當時の神話傳説の單なる記述に非ず、一つの解釋説明なり、之により日本の神話を理解する時解釋の解釋をなす要、他の記述との比較をなす要あり、記紀撰錄者によつて明瞭にされぬ點を更に解釋せんがため言語の豫定對象となつてゐた社會生活の事實を發見する考古學的研究とその言語的表現の形態を明かにする言語心理學的研究を必要とする、その立場から日本神話の解釋を試みたいと論じ、第二章「古代日本人の產靈信仰と言靈信仰」には、神と命とはこそなるとし、神典中命といふ尊號のあるものは、神命をうけたまはるもの・神が詔りごとして命となる、之が古事記の考へであり、書紀は、然らずこの違ひは編纂者の思想の相違より起る所し、また紀の卷二から神號の統一を失ふのは、中國平定に於ける部族統合の混亂を示すといひ、「かみ」は、アイヌの「かむひ」より由來した言葉で、日本民族固有の神の表象としては寧ろ日としての靈の表象ではなかつたかといひ、古代の日本民族の思想が原始民族の思想とがふ重要な點は、自然の本質として考へられてゐるものが單なるマナの如き表象でなく、產靈としての神であり、しかもその神が命として實現してゐるといふことである、従つて自然の因果が單なる部分と全體との空間的同一關係としてあらはされねばならぬのである所し、つ

いで、事は變化をあはらす時間的存在なりとし、之に實現することと實現してゐることとの二つの對立を認めねばならぬ、事に内在してをる實現のはたらきをむすび又はたまごいひ、靈によつて實現してをる又すべきものを事といふとし、日本人の思想では對象が作用に内在してゐるのでなくして作用が對象に内在してをる、故に日本人の思想は主觀的觀念論ではなくして客觀的實在論なりとし、かゝる思想の實踐的辯證法として第一に事の自然に顯現する物によつてあらはす「事依」と事を必然に實現せしむる人間の行為による「事舉」との二方法ありとする。ついで古代ではまた言が同じく「こそ」といはれてゐたやうに事よきす重大な物であつた言靈崇拜が單なる產靈崇拜とちがふ點は「事依」は既に「事舉」となつて事を必然に實現せしむる人間の行為としての言葉が言靈の表現として信仰せられたる點であると説き、第三章「古代日本人の唯物史觀」に於ては、神話時代の物質概念が神と名付けられたに限つて事を必然に實現せしむる人間の行為としての言葉が言靈の表現として信頼せられてゐる點であると説き、第三章「古代日本人の唯物史觀」に於ては、神話時代の物質概念が神と名付けられたにしてもそれが人間生活に對する物質的條件として表象されてゐる限り、そしてそれによつて人間生活の歴史が解釋されてゐる限りかかる世界觀はやはり唯物史觀である所し、日本の神話に於ける神統或は皇統を明かにしてゐる國造の神話は四つありといつて高皇產靈神を祖神とする太玉命の皇統神話、神產靈神を祖神とする太國主命の皇統神話、伊邪那岐大御神を祖神とする須佐之男命の皇統神話、天照大御神を祖神とする天忍穗耳尊の皇統神話とを區別し、之を生活形態を異にしてゐた部族の神話として一を產業神話、二を農業神話、三を海原又は暴風神話、四を高天原或ひは太陽神話とする。著者に從へばウマシアシカビヒコヂの神は、物の時間的實現關係としてあらはされねばならぬのである所し、つ

「きさし」としての生成を樹木或は太陽によつて表現したものであり、豊雲野神は雨水の豊富な野を意味し、宇比地邇、須比智邇は墳にて食器を作り鹽にて食物を焼く食事に關係を有する神である。され、角杙は獸類を捕ふる涼かさもなくば鹿や牛の如き獸類をつなぐ機であり、活杙は魚類を捕ふる堰か、さもなくば魚を活かすいけすと解せられる。イザナギ、イザナミは氏に従へば磯風磯波であり、アワナギ、アワナミ、ツラナギ、ツラナミなどと對照すべきであり、波と風は動と靜とを表現する相對的力であり、此力で國土が生成されたと説明するのは海原に生活する民族の神話としては最も自然な想像であらうとする。第四章「海原神話」と「暴風神話」にはオノゴロ島形成の話は、海濱で鹽をつくりし民にして考へつくべきものなりとし、國生みの神話は、波と風との關係から島を生むことを表現したのだらうと考へ、女神が活動的な波として表現されるのは、漁村に於ける海女の生活から不思議ならずとし、蛭兒は乾る子にて潮が乾るとき形態を實現する不生産な島ならんとし、女人言先立つはふさはずといふのは、漁人にさり磯波がこそ先立つことを欲つしなかつたからならんと解する。ついで第五章は「黃泉神話と禊祓神話」を論じ、第六章には「高天原神話と太陽神話」を考察する。氏によれば、高天原は天空にあらず天と地との限界なりとされ、根の國は、地の國にして地下の國にあらず、頸球は、統御の神話的表現であり、天照大神は、之を受くることにより統御の世界をうけもつとする。第七章「農業神話と產業神話」中には、天岩屋の神話は、農業神話としての太陽崇拜の表現なりと云ひ、天鈿女は、面勝つ神、カツハ撫ち合ふこと

、一種の講和談判の神なりとされ、その舞踊は、一種の神樂なりと論ぜられてゐる。

同氏の研究は、心理學者の立場より極めて斬新味を日本神話の研究に齎したことは否み得ない。氏が日本言語の特色、その神話の個性的相貌を求めるところに努力には敬意を表する。然し全體として氏の結論は、科學的立場よりしてそのまま容認することが不可能である。氏は本居宣長を非難されたが、氏の語原的解釋にも隨分獨斷の嫌ひがある。宣長は、その當時としては出來うる限りの材料を集めて立言してゐるが、城戸氏の祝は葉振りなりの説の如き、イザナギ、イザナミは、磯風、磯波なりといふ説の如き、もつと多くの資料に立脚して誰しも首肯すべき説明を下してもらひたかつた。古代人は皇祖諸神をカムロギ・カムロミといふ名で呼んでゐるが、この名の語尾ギミとイザナギ・イザナミの神名の語尾ミは、相應じて考察すべきものであり、ギは男性を表し、ミは女性を表すものではなからうか。なるほアワナギ・アワナミ等の諸神の名と對比することが出来るかも知れぬが、イザナギ・イザナミの神名がまづ存して他がそれから誘起されたとも解しうる。イソからイザに變じたといふ説明も可成苦しい。要するに語原の解釋は如何やうにもなされうるものであり、著者の主觀的見方に左右される恐れがある。心理學者も、かゝる問題を取扱ふ場合には出来るだけ嚴密な言語學の方法を採用してもらひたかつた。然らざる結論には安心して依據することが出来ぬ。氏の推理には可成獨創的な卓見があつて、讀者を魅するが、時々與太を飛して切角の議論に眞劍味を失はしむるのは遺憾に堪へない。

また氏が、神話を四つに分け、之を一々生活形態を異にせる部族の神話と明言されたのは可成大膽な態度がある。恐らく古代日本において神話組織時代の部族は、文明著しく發達した複合部族であり、之を海原生活とか農業生活とか明白に區分することが出来たかどうか疑はしい。この邊は今一應の再考を煩したい。

日本神話は復雜にしてこれを種々なる方面より考察することが出来る。心理學の立場よりかかる勞作を呈供された氏に感謝すると共に吾々史學者はこれに對し幾分の賛成保留をなさざるを得ないことを惜しむ。(松本信廣)。

### 個性の認識と文化の解釋 (今井貢著)

著者は昨年二月、二十六才の若さで物故された、本書は、故今井貢氏の遺稿集上巻として刊行せられたものである。

然し乍ら、その第一篇心理學に於ける個性の認識及び附錄デイルタイ「解釋學の成立」に就ては、(尤も後者は故人に依て始めて邦文に移植せられたものであるが)筆者はその資格を有せぬから唯第二篇日本古代文化に關してのみ紹介を試ることとする。先づ、第一章文化の個性とその解釋に於ては

ただ與へられた心理學的事實として、精神活動はすべて個人的主觀との關係に於いて性格的である、そしてその精神活動に於いて指向されてゐる、若くは意識されてゐるすべての内容は、その限り個性的に色彩づけられてゐるといふことを認めればよいであらう、あれとか、かなしがすさまじとか言ふ言葉はなるほど各時代を通じて見ても、それぞれの音形式(Lautform)として見れば、同一であるに違ひないが、それらの言葉によつて指向されてゐる意識内容は、平安朝の人人に於けると現代に於けるのとはもちろん同一ではない。(著者は意識内容の恒常假定を極力否定する)枕草紙の作者があはれによつて何を指向してゐるかを、又源氏物語の作者が同じくあはれによつて何を意味せしめてゐるかを明かにすることは、清小納言と紫式部との性格の理解の一歩であり又それからの意味形態を現代人があはれによつて意識する意味形態を比較することは、平安びとの精神的特性の理解の一歩となる。

心理學的事實としての人間の生活經驗は、すべてそれぞれの特殊な仕方でなされてゐる。そしてその特殊な仕方ではたらく精神の指向性が特殊な意味形態を創造する、中略人間の精神活動は、個人的にも社會的歴史的にも、それらが具體的な經驗的事實である以上は、すべて個性的なものである、言ひかへば生活經驗はあらゆる方面に於て特殊性をもつてゐるのである。

過去の或文化を解し理解することは、それに於いて文化形態がかつて生きてゐた所の Modus に於いて規定することである。高天原といふ一つの表象内容は、古代日本人に於ては天つ神たちの神つごひにつごひをる天上の場所である。彼等は現實の地上を人間の住む地よみの國を死者及びあらゆるけがれの集合してゐる地下の暗黒界と考へ、そしてそれに對し光に満ちた澄み渡つた明るい天空を神々のつごひの場所と考へた。そこには彼等の世界觀—自然哲學—の特殊の Modus があるのである。この Modus に於いては高